



# 善正寺だより

〒:512-0902  
三重県四日市市  
小杉町1014  
浄土真宗  
本願寺派  
善正寺  
☎:059-331-1670  
fax:059-332-0733

## 掲示板法話

### 悲しみを超えて 浄土に生まれること

### それが本当の生まれ甲斐である

寒い中にも、「光の春」が時折感じられる頃になりました。この冬は、インフルエンザが大流行し、コロナ感染もあつたらしく、皆さまは如何かと案じる次第です。昨年の師走から新年にかけて私の周りで、随分多くの方々が亡くなられました。突然のお別れに、何とお慰めの言葉をかけたらいいいのか、辛い思いを抱きました。

いのち頂いて生きる我々の前には、必ずいつか、老病死が迫ってくるのは誰でも知っています。でも高度医療の発達した現代では、難病と言われた癌などでも早期発見、早期治療を施せば、かなり延命できる場合が増えていきますので、「なぜ、うちの人がこんなに速く逝ってしまうのか？」と嘆かれるのも無理からぬことです。また、天災・人災(地震、事故)など、予期しない事態で突然の別れがやってくることも、稀ではありません。老病死を我が事と思えずに他人事と思ひ、やり過ぎしていることが我々凡夫の常であります。親鸞聖人は、あるお手紙の中で次のように書いておられます。(現代語訳)



「何よりも、昨年、今年、老少男女、多くの方があの人もこの人も亡くなられたことこそ、哀しいことです。但し、生死の無常である道理は詳しく仏がお説きになつておることですから、驚き思し召すことではありません。まず、善信(親鸞聖人)の身の上から申せば、臨終の際の善し悪しは問題ではありません。信心が定まった人は(浄土に生まれることに)疑いがないので、既に「正定聚」(必ず浄土に生まれる身と定まった仲間)の位に住していることになります。ですから愚痴、無智の人も安心して亡くなつていくことができるのです。」

親鸞さまは、悲しみの人に寄り添いながらも、その悲哀をのり超えて浄土に生まれること、そして永遠のいのち、さとりへの境涯に至ることこそ、人間としての本当の生まれ甲斐である、と言われるのです。

「本願力にあひぬれば  
空しく過ぐるひとぞなき  
功德の宝海みちみちて  
煩惱の濁水へだてなし」(高僧和讃)

葬儀のとき、正信偈、念仏に続いてお称えされる御和讃に、「阿弥陀如来の御本願に遇うたならば、それまでのように空しく過ぎる人はいない。宝の海のような名号(南無阿弥陀仏)の功德がその人の身に満ち満ちて、煩惱によつて濁つた水が、そのまま清浄の海となるように、煩惱具足の凡夫もそのまま浄土に往生できるのです」と言われます。お浄土に往生された方は、後に残る家族や親族に、命を懸けて往生浄土の道をお示し下さつた仏さまです。遅れ往生させて頂く我が先達と仰ぎつつ、お念仏申しましょう。

## ☆行事ご案内☆

◇春季永代経 講師:山田教尚師

3月15(土)・16(日)午後1時半

※15日午前10時半お経開き(招待者)

◇三全仏教婦人会総会 善正寺にて

3月20日(祝・木)午前9時

◇三重組十三日講 3月13日午前・午後

元新町 常德寺様



善正寺  
ホームページ



住職と坊主の  
つれづれ日記

## ☆写真アラカルト☆



本堂での満中陰法要風景



亮爾、句集「冬晴」

夕方5時の鐘撞年中無休誰でも可ご褒美有一線会テレホン法話三重組五か寺が週替わり  
3分法話Tel059・354・1454  
善正寺ホームページ32年間毎月発行の善正寺だよりと17年間毎日更新のブログ住職と坊主のつれづれ日記大好評!夫々のQRコードを使い閲覧可スマホのマイク機能からも過去の寺報全部見られます。一日平均百人以上が訪問、総訪問者数46万2千人、お悩み相談可新納骨堂後継者の無い方お墓でお困りの方ご相談を法事場所でお困りの方本堂使用可。日時を相談下さい新法縁廟墓じまいや納骨でお困りの方記名碑有 格安



### ぼうもり 坊守スケッチ

## どうすればよかったか

この奇妙な表題は、昨年末に封切られたドキュメンタリー映画の題名と同じです。この映画は藤野知明監督が統合失調症の8歳上の姉を、精神科の病気発症から亡くなるまでを撮影し続けた記録です。彼の両親は共にドイツへ留学した経験もある著名な医師であり研究者。姉も小中高と聡明で医学部受験を目指しましたが、3度失敗し4度目で合格。解剖の授業後、突然意味不明なことを叫び出しました。両親は知人の精神科医を受診しましたが、「一時的にバランスを崩しただけ」と診断。両親も自分たちの手元に置いて様子を見ることにしました。しかし事態は悪化する一方で、ついに精神病院に入院させましたが、薬が合わずに退院。その後、夜昼構わず意味不明なことを叫んで暴れました。とうとう両親は玄関に鎖と南京錠を設置して、閉じ込めました。弟はそんな実家の様子を20年近く撮影し続けました。母親も認知症になって84歳で亡くなり、父親は脳梗塞で車椅子生活。精神状態がやや落ち着いた姉に、ステージ4の肺がんが見つかり、父親より先に62歳で亡くなりました。父は



納棺の時に「お前と共著の論文が書きたかった」と長年の夢を語り、その一部を棺に入れました。最後に撮影者の弟が「どうすればよかったか」とのつぶやきが印象的でした。

私達も自分の人生を振り返った時に、「果たしてこれでよかったか?」と思う時はありませんか?しかし過去は塗り替えることはできません。変えられるのは現在の心持と未来だけです。たとえ挫折だらけの過去であっても、それは今の自分を作り上げた礎になっています。常に自分の心と対話しながら、後悔のない残された時間を過ごしたいと思います。

#### お悔み申し上げます

★**館美代子様**(99歳) 1月22日往生、小杉一丁目

★**野地 拓機**(88歳) 1月27日往生、大谷台2

#### カンパありがとうございます

栗本洋子様、TS様、TT様、他感謝

#### ホットニュース

中1の孫・亮爾が2冊目の句集「冬晴」を出版。小5の秋の第一集「紅梅」以来約2年で二百句厳選出版。寺報「俳壇」にも釋秀龍で毎号投句中です。

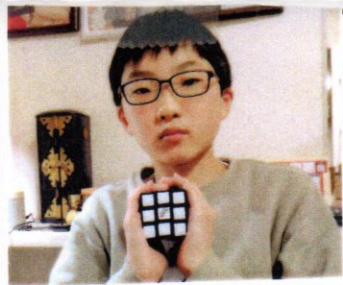
#### 若坊守の「コトコト日記No.122」

長男の通う中学校で、三学期始めに三十一年の伝統がある「百人一首大会」がありました。

小四の長女も、国語の授業で百人一首を習い、七首ほど暗記していました。その練習を聞いていたら、「花の色は移りにけりないたづらに我が身世にふるながめせしまに」という小野小町の有名な一首が、一寸可笑しいことになっていました。「うつりに蹴りな、いたづらに」と区切ると、意味が違って受け取られます。現代とは違う表現や言葉は、初めて出会う子ども達には新鮮な日本語なのかもしれません。

今まで百人一首にあまり親しんでこなかった長男は、突如やる気を出して、ほぼ百首全部を覚えてしまいました。もう大人は太刀打ちできません。覚え方には「一字決まり」というのがあって、一字聞けばすぐに取れる札のことをいいます。二字決まりから六字決まりまであって、覚えるのは大変ですが奥深いですね。

非日常的な物語の世界へ、タイムマシーンで行くような、百人一首の面白さを感じました。



### 俳壇

筆の先指震へをり福は内 釋妙水

初場所や波打つ筋肉歓声も

記念日や予報はいつも雪じるし

陽光に來る春みたり悴む手 釋楽邦

水仙の強き香満つる一人部屋

蠟梅の透けて艶めき薫り寄す

切干は風と日光で甘くなり 釋住安

夏柑が色づきははじめ数かぞえ

節分や齡の数だけ豆を食べ

石垣に蟻の運びし薑咲く 釋妙梅

炬燵しまい手持ち無沙汰の春の宵

特大の牡丹餅亡父が喜びそう

冬晴や山吹色ののぼり旗 釋秀龍

風をさえぐ物なき道にある

スースーと小春日和の稚児の息

眼帯を外せし我に山笑う 釋清風

氷割りと興ずる腕白遅刻せり

冴え返るうつむき顔でバスを待つ

#### ★ 編集子より ★

「善正寺だより」375号をお届けします。◇この冬の間に、随分多くの門徒さん方の訃報があった。冬の寒さにとりわけ高齢の身にこたえるののだろうか?◇「生あるものは必ず死に帰す」、何度も聞かされる真実の言葉だが、「まだ若い」「他人事、他人事」とやり過ぎず!◇「老少不定のさかひなれば、たれの人もはやく後生の一大事を心にかけて、阿弥陀仏をふかしたのみまぬらせて、念仏申すべきものなり」(白骨の御文章)。蓮如上人の仰せをかみしめたい。◇春彼岸は、お浄土からの呼び声を聴く仏縁ですね。合掌。



一歩一歩春の足音が聞こえてきます。大抵の人が夏には涼しい方がいいと言いますが冬には暖かい春が待ち遠しいと願います。私は一月に大腸内視鏡検査でポリプ2個を除去。一週間後は左目の翼状片剝離の手術。住職も二月初めに左目の手術を受けました。手術通院中は、お互いを車送迎しました。今まで二月月に一度血圧の薬をもらいに行くだけでしたが急に医者通いが増えました。後期高齢者になった途端に痛気が押し寄せて、病人の気持が少しは理解できるとなりました。でも何でもそんなに元気なの？と尋ねられます。毎日やるべき仕事に追われて、じつと寝ている暇がないからよ。大腸内視鏡検査でも、普通は深刻に受け止めるけれど、ネアカな性格なので大腸の大掃除をしてももらったと受け止めたわ」と返答しました。目の手術をすると、二週間はスッピンで過ごさなければなりません。その時の気持を「スッピンも気楽でいい」と早速入りでブログに投稿すると、遠方の方から「笑顔に勝る化粧なし」と初コメントを頂戴しました。その言葉に励まされて、年齢を覆い隠す化粧は、私には無駄な努力と受け止めて、素直に明るく生きていきたいと思いました。不思議なことに、それ以降ブログの訪問者数が増えて、一日百人を超える日が多くなり、この縁の輪に感謝しています。寺報とブログは私達の生きる証。これからもよろしくお願います。

合掌

令和七年三月

善正寺坊守拜